
儀礼の変容

『現代宗教 2022』編集委員会

2019年の末から続く新型コロナウイルス感染症のパンデミックで、人類社会は巨大な衝撃を受けている。そのことによって、世界は大きく変わっていくのではないか。大きな変動期に入り混乱を極める時期が続いていくのか、人類社会のあり方が見直され新たな希望が見えてくるのか、にわかに予想することはできない。だが、「現代宗教のゆくえ」という観点から、「儀礼の変容」という点に注目してみると、何かが見えてくるかもしれない。

コロナ感染症が広まった地域では、長期にわたって人が集まって儀礼を行うことができなくなる事態が生じた。カトリック教会はミサを停止し、メッカ巡礼は大幅に人数制限がなされた。韓国のキリスト教系の団体やユダヤ教の正統派が安息日の集いに対して、厳しく取り締まりを受けるようなことも起こった。日本では葬式や法事の簡略化が進み、かわってオンラインの説法や読経に人気が集まるようなこともあった。

だが、特定の集団が定期的集まるような儀礼は、コロナ感染症に苦しむ前から簡略化が進んでいた。すでに長期的に儀礼の後退の傾向が続いていた地域が多いのではないか。また、それにかわる交わりの形が模索されていたのではないか。たとえば、不特定多数の人がリアルな場やデジタル空間で出会いながら、自己開示をしたり、ともに自己変容を求めるなどの機会が増えてきたのではないか。赦しや和解の新たな形も編み出されているのではないか。伝統的な宗教が果たしていた機能にとっ

てかわり、新たな儀礼的な交わりが育ってきているのではないだろうか。

災害、事故、事件などの後に即興的に悲しみをともにする空間が現出するようなことも増えている。米国のBLM運動では、テニスの選手がマスクに死者の名を記するなど、犠牲者の死を悼む新たな形態が目立った。伝統的な宗教施設や通過儀礼や季節の行事にも、じわじわと生じている変化があるのではないか。人と人をつなぐ交わりのあり方は、自ずから儀礼のあり方を変えていく。それは信仰やスピリチュアリティの内実の変化とも関わっていると予想できるだろう。

この特集では、以上のような問に導かれながら、現代宗教の動向を捉え、今後への展望を得ることを願っている。答えるのが容易でない問いだが、挑戦的な試みとなる可能性もある。

(文責：島菌 進)